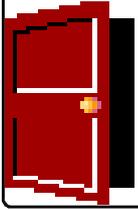


令和5年度《昨年度に続き、今年度も読書活動の楽しさと大切さを伝えたくて》



読書活動への扉を開く！

N o 86

桑村小学校令和6年1月30日

「はごろも教育研究奨励賞 グループ賞」を受賞しました!!

函南町立桑村小学校長 渡邊 衛
令和5年度、本校は「読書体験と表現活動を柱に『豊かな感性』を育む教育活動の創造～学校、家庭、学校運営協議会(地域社会)とのつながりを大切に～」をテーマにプロジェクトチームを編成し教育活動に取り組んだところ、その成果が認められ「はごろも教育研究奨励賞 グループ賞」を受賞することになりました。

本研究実践は、令和4年度に取り組んだ学ぶ児童も、指導する教師も、送り出す保護者も、見守る地域住民も幸せだと感じる学校を協働で創りたいという願いのもと、「小さな学校の『強み』を土台に、自然に恵まれた学習環境を生かした体験活動と読書活動をつなぎ、『豊かな感性』と『深い思考力』を育成する学校運営を目指して」をテーマに全校体制で実践したものを発展的に持続可能なものへとしていったものです。

この令和4年度の実践は、「豊かな感性」と「深い思考力」の育成を目指して、学校、家庭、地域社会が協働で体験活動と読書活動をつなぎ、推進していくことで「豊かな感性」と「深い思考力」を育成するシステムが確立できたことに成果がありました。

これを単年度の実績で終わらせてはいけないと考えた校長は、昨年度の本校の「強み」を働かせた教育活動を発展的に継続していくことをねらい、本校職員と学校運営協議会委員からなるプロジェクトチームを編成し、研究テーマ「読書体験と表現活動を柱に『豊かな感性』を育む教育活動の創造～学校、家庭、学校運営協議会(地域社会)とのつながりを大切に～」の具現化を目指して取り組むことにしました。

この研究実践では、学校のもつ強みを働かせ、目の前にいる児童一人一人の「豊かな感性」を育む教育活動に、学校、家庭、学校運営協議会(地域社会)が協働で取り組み、魅力ある幸せな学校を創造し、「学校文化」にまで高めていくことを目指して取り組んだものです。

学校は、児童が自分の夢をもち、挑戦し続けることができる場所です。そこでは、児童一人一人が自分の有する資質・能力を思う存分発揮し、全ての児童が輝くことのできる学習環境が整っていることが大切です。学校長は年度当初に、全職員を前に学校教育目標(夢に向かい 感性を育む 桑っ子)と本校で育成すべき資質・能力について説明すると共に、児童には朝会で、保護者にはPTA総会や学校便り、そして地域住民には、ホームページを通して周知し、「豊かな感性」の大切さとその育成について共有しました。



令和4年度に、読書活動の推進を全校体制で取り組んできた【PTA総会での説明の様子】実績を踏まえ、一人一人の児童が読書活動から発生する様々な思いを「読書体験」へと高めていくこと、そして、「感性」を育むには、自分が外界から受けた様々な刺激を自分ごととして感じ取り、深く考え、その思考をつないで新たに形成した意味を自分なりに表現することで「豊かな感性」となることを全職員で共有しました。

「豊かな感性」の育成を目指した取組として、「読書を楽しむ自分へのラブレター」があります。自分のよさを見つめる目や他者のよさを見つめる目は、読書体験を通じた様々な登場人物との出会いから育まれることもあります。今回の「読書を楽しむ自分へのラブレター」の取組は、児童それぞれの読書体験を表現活動とつなぐことで「豊かな感性」の伸張を図ることができたことに成果があります。そして、自分の成長はなかなか一人では見出せないものです。自己の振り返りと学校長からのコメントを関係づけることにより、児童は更なる成長を実感していくことができました。

※資料：第5学年児童の「読書を楽しむ自分へのラブレター」の実践例

Aさんへ

Aさんは『としょかんライオン』にはまっているね。夢中になって読んでいるね。知らな

かったことが分かるようになって役に立ったんだね。この本から「ルールはやぶってもいいときがある」ということを学習したね。4年生のときまでは、なかなか文章だけの本を読むことができなかったけれど、今年は校長先生の本や図書室の本を借りて挑戦してみようと思ったことはえらいね。そして「読書活動推進リーダー」に立候補したね。桑村小学校のみんなに本のみ力や楽しさを伝えられるといいね！今年自分自身がたくさんの本を読むことでみんなの見本になろうとする思いがかっこいいね。がんばってね、応援しているよ！

※校長先生も『としょかんライオン』は大好きな絵本です。その本からいろいろなことを感じたり学んだりすることは、とても大切な体験です。こうした本の魅力を「読書活動推進リーダー」として、桑村小学校のみんなに伝え、広めようとする姿勢はすてきなことであると思います。リーダーとしての活躍を楽しみにしています。(※校長からのコメント)

次に、「親子読書会」も企画し、実践しました。ICT環境の整備により一人一台タブレット端末が児童全員に配備されました。こうした学習環境の整備は、休み時間にタブレット端末を利用し、タイピング等の練習に取り組む児童を多く発出しました。こうした環境の中、学校の取組だけでは読書活動を推進していくには限界があることが心配され、新たな方法を講じるが必要となりました。そこで、学校長は学校運営協議会委員と協働で「親子読書会」を企画・運営することにしました。



【親子読書の会より】

この「親子読書会」は、午後6時から午後8時の間に学校の教室で親子が自由に読書を楽しむための場所を提供し、メディアからの影響を一切受けずじっくり読書に親しむことをねらったものです。

この会には、本校児童とともに父親、母親、幼児、卒業生が参加し、読書を楽しむことを柱とするコミュニティが確立できたように思われます。また、参加者が読書を楽しむとともに学校運営協議会委員の発案で「親子紙芝居」が行われたことは、発展的に持続する上で大きな意味をもつものとなりました。そして、ここに多くの幼児が参加することから、読書活動を柱とした幼児教育と小学校教育との円滑な接続の視点からも有効な取り組みとなったことは大きな意味を生み出しました。

更に、「読書推せん文コンクール」に全校で参加しました。公益財団法人「博報堂教育財団」は、2020年より「お気に入りの一冊をあなたへ 読書推せん文コンクール」を実施しています。このコンクールの良さは、読書感想文と比較したとき文字数が250～300字と少なく、作文に苦手意識を有する児童も参加しやすいところにあります。また、自分の思いを伝える相手を特定することで、どのような思いを届けたいのかが明確になり、自分の感動を自分の言葉で表現する力が身に付くことが期待されるよさがあります。

読書体験を通して、「豊かな感性」を育むには、図書から得た情報を自分ごととして感じ取り、深く考え、その思考をつないで自分の言葉でその意味を表現することが大切です。今回の「読書推せん文コンクール」に全校で取り組んだ実践は「豊かな感性」を育むうえで有効であったことが検証されました。

※資料：第1学年児童の実践例

【第1学年児童の作品と校長のコメント】

◆すすめたい相手 ほのかちゃん

◆本の題名『ピカチュウとはじめてのともだち』（小学館）

このほんはわたしがびょういんににゅういんしているときに、ママがかってきてくれました。はじめてのともだちということばで、すぐにほのかちゃんがおもいうかびました。ほのかちゃんは、ようちえんでできたはじめてのともだちだからです。ピカチュウがみんなでりょうりしているところは、ほのかちゃんとおままごとをしたときをおもいだしていいなとおもって、こころがぼかぼかしました。

さいごにピカチュウがともだちといっしょにほしぞらをみて、わたしもうれしくなりました。ずっとにゅういんしていたから、このほんをよんだらともだちにとってもあいたくなりました。

※Aさんは、幼いとき入院していて、きっと寂しい思いをしていたことと思われます。そんなとき、お母さんが『ピカチュウとはじめてのともだち』を買ってきてくれたのですね。幼稚園に通うことができ、はじめてのお友達が「ほのかちゃん」。素敵な友達に出会えてよかったですね。「さいごにピカチュウがともだちといっしょにほしぞらをみて、わたしもうれしくなりました。」と書いてあるところが、私は大好きです。Aさんの気持ちがよく表された表現だと思うからです。一人で見ると星はどんなに輝いていたとしても、友達と見る星にはかなわないのです。「ほのかちゃん」を大切にしたい気持ちと、会いたいという思いがよく伝わってきます。(校長からのコメント)

最後に、読書体験を広げる「町立図書館に出かけよう」の実践を紹介します。これまで

本校の児童は、町立図書館から家が離れた場所で生活しているため、普段その施設を利用することがほとんどありませんでした。そのため、町立図書館から「図書館出張貸し出し」という支援を年間3回受けています。こうした状況下、何とか児童が親子で町立図書館に出向き、豊かな読書体験をさせたいと考えた学校長は、夏季休業を利用し「町立図書館に出掛けよう」を保護者の協力のもと実施しました。児童は、それぞれの発達段階に合わせ、町立図書館を利用するよさを発見し、表現することで「豊かな感性」を高めていきました。

夏季休業中に学校図書館を開放するという学校が多い中、本校では外部機関と連携し、豊かな読書体験をさせたいという願いのもと実践しました。下記に実践した子供と保護者の感想を紹介します。

※資料：第6学年児童と保護者の感想例

【第6学年児童の感想より】

私は今まであまり図書館に行っていなかったのだけれど、今回行ってみて小さい子供や大人の方がたくさんいました。また、本を借りるときに本の題名をパソコンに打てば、どこにあるのかを教えてくれる機械があり、すごく便利でした。

私はスイーツを作るのが好きなので将来の夢はパティシエになることです。そこで『パティシエになりたい』という本を借りました。他にもスイーツ本はあったのですが私は読解力をつけたいと思い物語系を借りました。函南町立図書館に行って、私は誰もが楽しく本を読めて、それも家族と一緒に読めるという良さ、また、たくさん本があるのでいつでも来て、いろいろなことを学ぶことのできる良さにも気づき、改めて図書館の良さを知ることができました。保育園に通っていたときは図書館に近かったので、借りることが多かったことを覚えています。しかし、小学生になったとき、あまり行く時間がなくなってしまい行けなくなってしまいました。これからは、時間をみつけて図書館に行ってみたいと思います。そして、読書推進リーダーとして、学校のみならず本の良さを伝えていきたいです。

【第3学年保護者の感想より】

思い返せば、私も小学生の頃はよく本を読んでいた。でも、成長と共に本を読まなくなりました。そして、大人になって改めて読書の大切さを知りました。誰でも一度は「自分はこれでよいのか」「あの時、もっとこうすればよかったのではないか…」と思い悩む時期があると思います。その解決策の一つが、読書だと思います。そして、「いろいろな意見があってよい」「いろいろな人がいておもしろい」とポジティブに物事を捉えることができるようになれば、お互いを理解し合ったり、許すことができるのではないかと思います。大人も子供も1日を振り返り、自分を見つめ直す時間を設けることは、人生においてとても大切なことだと思います。

本校児童は、町立図書館に出向き、それぞれの発達段階に合わせて「読書体験」を楽しむことができたことがそれぞれの振り返りから伝わってきました。また、児童とともに参加した保護者からも好意的な感想が寄せられました。学校を開放することも大切なことですが、町の施設を活用することは学校教育と生涯学習との円滑な接続の視点からも、大きな成果につながったものと思われまます。

本校児童の「豊かな感性」を育むためには長い年月が必要となります。これまでの実践をいかに引き継ぎ、発展させていくのが大きな課題となります。本校の強みを働かせた教育活動の歩みを止めてはならないからです。そのためには、教職員、児童、保護者、学校運営協議会委員をはじめとする地域住民との本校児童の「豊かな感性」を育もうとする思いの共有化と発展的な取組の持続化が大切なこととなります。学校長は、令和4年度に開発した読書活動推進の取組を令和5年度はプロジェクトチームのメンバーと共に取り組み、その一つ一つを協働的、発展的に実践していくことでその必要性と可能性を丁寧に伝えてきました。令和6年度以降においてもプロジェクトチームが中心となって、全校体制で読書体験と表現活動を柱に「豊かな感性」を育む教育活動を推進し、更に発展させていくことで「学校文化」にまで高めていくことが期待され、その道標を確立できたことは大きな成果となりました。

しかし、この研究の成果はすぐには形として現れません。桑村小学校で学んだ児童が「豊かな感性」をいかに発揮し、母校を愛し、自分の生まれ育った地域を誇りに思い、それぞれの夢に向かって突き進もうとする姿が見られたとき、それは成果として評価されることとなります。これからも桑村小学校は、学校のもつ強みを働かせ、目の前にいる児童一人一人の「豊かな感性」を育む教育活動に、学校、家庭、学校運営協議会(地域社会)が協働で取り組み、魅力ある幸せな学校を創造していきたいと考えます。

今回の実践は、本校HPにある「桑村小アップデート」に掲載します。そちらもご覧ください。保護者の皆様、地域の皆様、これからも応援をよろしくお願いいたします。